

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	林田 枝実
主な担当科目	ピアノ指導法応用Ⅰ,ピアノ
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	アフターコロナも定着したが、コロナ禍の中高生活を経た受験生、新入生の音楽への取り組む姿勢は大きく方向転換した。そのような背景の中で、学生の新しいスタイルを理解しモチベーションを維持させながらも、先人達の軌跡を辿ることを伝える両輪での取り組みを教育目標とする。結果として、以前にも増して、学生一人一人に寄り添う学びの時間を惜しまずにモットーとする。
2024年の教育に関する自己評価	デジタル化の急速な進展により手近に選び放題の音楽に埋もれている学生らに、ライブの真価をいかに伝えるか、常に模索した。それは、まさに原点に立ち戻りに基礎を伝授することと、学生個々の特性をいかに尊重することかという側面であった。その結果、実力差を超越した学生個々の成長・手応えを見てとることができた。そして、卒業・修了見込み学生も彩り豊かに進路を得ることができたことが何よりも喜ばしい。
2024年のFD活動に関する自己評価	年間共通テーマである「新しい時代の大学人に求められることとは」「これからの時代をしなやかに生きていくための教育とは」の二点を、さまざまな角度から追求した。特に、2025年度にスタートするセメスター制度に関わる新カリキュラムを部会全体、そして科目担当として準備してきた。研修会でのさまざまな講義やワークショップは、アフターコロナの新時代に対応する素晴らしいものばかりで、学びの多い年度であった。
授業改善のために取り入れた研修内容	年々研修会の内容は肝要なものとなっており、各回の内容は日々の指導の根幹となる内容であった。特に、ICT,情報セキュリティについては、学生との日頃のやり取りであったり、情報共有の場でも、より内容の精査を盛り込みたい。また、4月に引き続き9月の大学院FD研修会では、増加傾向にある留学生問題、そして、博士課程の位置付けなどが明確となった。博士課程の学生を担当している現在、改めて日々の指導にヒントを得た次第であった。また、常にグループディスカッションでは、部会運営、日々の授業に直結する材料を得ることができた。

2024 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:570 教員名:林田 枝実

1) アンケート結果に対する所見

実技について、2023 年度アンケートでは、22 名中 4 名の回答しか得られなかったのに対し、24 年度は 23 名中 11 名の回答を得られたということで、回答率の面ではやや回復傾向である。しかしながら依然としてコロナ前には及ばず、改善の方策はあると考える。

一方、例年のことではあるが、シラバスについて、学修時間、教育到達目標について、学生の資質、その個人差が背景にあることも念頭に置かなければならない。

音楽教育メソッドの自由記述には、多彩な年齢層の学生さんの肯定的なコメントが多く見受けられ、数年前から部会で内容を検討してきた成果と、複数担当の飯田先生の細やかなご準備の賜物と考える。

2) 要望への対応・改善方策

僅かとはいえ、特に実技のシラバスについての評価は、シラバス内容と学生個々の課題との擦り合わせが未だ完全でないことから、より一層、レッスン現場で一回毎にその課題に取り組んでいることを伝達する必要がある。特に技術的な問題を抱える学生には、長期的に、時には年単位で課題克服を目論んでいるケースもあるので、これとシラバスの内容をいかに共存させることができるかを対話と実践を通じて改善していきたい。ローマは 1 日にしてならずという領域であることを共に共有していきたい。

ピアノ教養特論Ⅱのレポート提出運用については、取りまとめの教員に一任しているので、部会で再共有して、運用方法の改善に努めたい。

3) 今後の課題

学生層の変容、特に音楽経験・バックグラウンドの多様性も昨今では目立つようになっていく。デジタル界を成長してきた学生達の音楽に対する手の伸ばし方も大きく変わっているが、仲間同士が隣にいないければ伝わらないことを学生達がいかに理解できるか、折角音大の門をくぐり、極めて恵まれた環境にあって、さあ今何が大切なのか、必要なのか、再確認する時期が来ていると感じる。

学内外さまざまな指導現場では、たくさんの情報で思考が満タンとなり、肌感覚で動く実感が乏しい現場に遭遇することが増えてきている。言葉のセンス、表情の豊かさ、一人一人に備わっている感性を、もう一度引き出していきたいと考えている。音楽をするための大学生活とはどのようなものか、学生と改めて模索していきたい。

以上